

モジョパイットの頌詩ナガラクルタガマ

別 技 篤 彦

は し が き

ジャワ史における黄金時代と称すべきものは何といつても中世のモジョパイット王国の時代である。ことにハヤム・ウルク大王と称せられたラジャサナガラ王の治下にあつてはこれを補佐する名宰相ガジャ・マダの協力によつてジャワ史上稀にみる輝かしい時代が展開された。いずれの国においても国威が輝き、文化が隆盛におもむく時代にはこれを讃える詩が生れるものであるが、モジョパイット王国のこの盛時に生れて感激をとどめ得なかつたのが当時の宮廷詩人プラパンチャであつて、その作に成る長編叙事詩ナガラクルタガマは実にハヤム・ウルク大王の功績を讃えるとともに当時のジャワの国情を記した貴重な文献であり、歴史地理学的見地からも大きな価値をもっている。

この詩は一三六五年に完成したものであるが、その後のモジョパイット王国の没落、イスラム勢力の強化、オランダの侵入などの歴史的大事件が相ついでジャワに起つてゐる間にいつかこの偉大な文献は表面から消え失せてしまつたのであつた。然るに一八九四年十一月、当時遠征軍を小スンダ列島のロンボックに派遣したオランダが偶然そこで棕櫚科植物であるロンタル樹の葉に古代ジャワ語を以て書かれた貴重な文献を発見した。これが実にナガラクルタガマであつたのである。長さ三十八センチ、幅三・五センチの細長いロンタルの葉数十枚に亘つて細かく記されたこの古

代文献の発見はまことにジャワ史研究上特筆すべき出来事であつた（現物は今オランダのライデン大学に所蔵されている）。この発見によつて始めブランデスが研究に着手し、ついで言語学者のケルンが十数年を費して一応のオランダ語訳と註釈とを完成、これをさらにクロム教授が補足したのである。しかしヨーロッパ学者にとつてはなお不可解や誤解の点も少なくなかつたため、現在インドネシアのガジャ・マダ大学（ジョクジャカルタ）教授のプロボチヨロコ博士がジャワ人の言語学者、歴史学者としての立場からオランダ学者の註釈をかなり補正するところがあつた。こうしてこの四人の学者の努力により、ナガラクルタガマの全貌は六百年ぶりにわれわれの目に明らかにされたのである（1）。

ナガラクルタガマは全篇が九十八の詩に分れ、その一つ一つがさらにいくつかの短かい詩から成っている。そしてテーマによつても分類されている。ナガラクルタガマというのは「宗教によつて建設された国家」の意味であり、當時のモジョパイト王国がシヴァ教、仏教などの精神的基盤によつて建設されていたことからの名称であるが、この詩の本当の名称は「デシヤワルナナ」であり「デサ」（村落）の記述という意味をもっている。これも王国統治の必要上、国内の調査を行った記述から出ているのである。そしてこの詩は作者がその地位の關係上、たえずハヤム・ウルク王の側近にあつたため、視野は限定的ではあるが、それでも當時のジャワ内外の情勢は十分に窺い得られる。プロボチヨロコ博士がこの詩を以てジャワ史料中第一級のものとするのもこのためである。オランダの史学者ベルフも「ナガラクルタガマはジャワにおける歴史記述の出発点であり、高級文学としてジャワ王朝の実状を取扱つた最初のケースである」と述べている（2）。モジョパイト時代の史料としてはこのほかにパラトン（3）があるが、記述の正確さにおいてナガラクルタガマにまさるものはない。本稿はその主要な部分を若干の註釈を加えつつ記述するとともに

歴史地理的意義をもつ個所を指摘しようとするものであるが、ただこの原型が詩である以上、美しいリズムを以て記されていることはいうまでもなく、従つてその翻譯に當つては十分な注意と努力が必要となる。しかしここではただその内容の大体を知るといふ意味から散文的に訳したことを予め断つておきたいと思う。

(一)

(第一歌) これはまずシヴァ教と仏教の神を崇めてからハヤム・ウルク大王の誕生について述べる。冒頭の一節は次の記述から始まる。

おお君よ、保護者を崇めまつる。君の足下にひれ伏しておろがみまつる。われらの心の中に常に在わす透明にして見えざる君よ。物質と非物質とにつながりをもつシヴァ・ブダよ。スリパルワタナータ！救いなき者の保護者よ。世界の統治者の上にある統治者よ。神の上にある神よ。最も考う可らざるものとして、而も同時に現世に顕現することにより見ることを得るものよ。……人々ヴィスヌ教徒に対しては性格なきものとして、ヨギに対しては王の神(イスワラ)として、カピラ(サンキヤ哲学の信奉者)に対しては個人的靈魂(ブルーサ)として現わるものよ。繁栄に対しては具体的な形をもつヤンバラなり。すべての学問の神としてはワギンドラ(ブラーマ)なり、愛の技術の教えにおいては愛の神なり。障害物を除去する手段としては世界の安寧を保証するヤマの王なり。

当時のモジョバイト王国においてはシヴァ教と仏教とが相ならんで信奉されていた。別の面からいえばここにも融通性に富むジャワ宗教の特色が現われていたのである。

昔サカ年(4)、大洋、天の世界の年(一一〇四年)に大王ありき。戦いに勇敢に、恰も神格をもてるもののごとく、母の体より生れざりしものとして知られ、神聖なるギリンドラ(ヴィスヌの神)の御子なりき。

故にわれは王の歴史を作り給ひし人、すなわちウイルワティクタ（モジョパイト）の神聖なる統治者ラジャサナガラ王、国のよき支配者の足をほめたたえんと試むるなり。バータラ・ナータの再生のごとく彼は人民の不名誉を根絶し、ジャワ全土はその下にひざまづき、その力はさらに遠き国にまで及びたり。

サカ年の『季節、矢、太陽』の年（一二五六年）、王は統治者として運命づけられて生れ給う。未だカフリパンにて母の胎内にありし時より超人たることを示す多くの前兆現われたり。大地はゆれ、火山より煙立ち昇り、火の雨ふり、雷とどろき、電光空にきらめく。高きカンプートの山は鳴り、悪人は死しぬ。

こはバータラ・ギリナータが具体的なる形において王位に顕現せる証拠なり。君の治むる限り全ジャワは征服され、尊びてその下にひざまづく。ブラーマン、クシャトリア、ヴァイシャ、スードラ、四つのアスマラはおのその仕事に忠実に励めり。大王の男らしき力を恐れて悪人もその仕事をやめぬ。

第二歌から、第六歌までは大王の祖母、父母、同胞および縁者の主要なものを讃える系譜的な部分である。第七歌に至って改めて大王を讃えるとともにその政策の一端が窺い知られる。

（第七歌）

われは太陽にも似て世界を征服し給う大王の領詩を述べんとす。敵は暗黒のごとく打ち砕かれ、世界のすべてを大王は支配し給う。善きものは陽にひらく水薺敷のごとく幸福に、悪しきものはその顔を見せずして陽に向いて閉づる白きニムフェアの花のごとなる。ジャワ全土は忠実にしかも謙譲に大王に税金を支払うなり。

地上に雨をもたらすサタマニユ（インドラ）神のごとく君は人民の貧しさを救う。……人びとは君においてワルナ（大洋）のごとく宝を見出す。大王はワユ（風）神のごとく常に密偵を用いていづこの土地にも入り込み給う。

外に向いては大王はカマデワ（愛の神）の姿をなし、その生ける姿を以て地上に降り給えり。凡ての王妃、王女はラティ（愛の神の妃）のごとし。上位の女公、ウイジャヤラジャサは（ハヤムウルクの第一妃）ススムナの女神にも似て比類なく美わし。

（第八歌）これは当時の帝都モジョパイット、ことにその中核をなすクラトン（王城）の部分の描写であり、建物や構造が詳細に記されている。

われは首都のすべての驚異につき記さむ。赤き煉瓦の外壁は厚く高し。都の西の入口には大なる広場ありてその中央には深き水がめぐり流れたり。各建物のテラスをその足もとにもてるブラーマスタナの樹は密生して高さを異にする並木をなせり。そこにパセパンの警察監督として絶えず警護のものの屯ろするところありき。

北方には美しく見事なる主門あり。その鉄の扉は無数の神の姿もて飾らる。東側に隣りて丈高き楼あり。その床は白き石もて敷かる。北より南に向い市場の広場あり。毎サイトラ月（四月）に軍隊ここに会議のため集まる。南方には一の美しき十字路あり。

広きは四方にトーナメントのための広場をもち、中心に高樓をもつマングントゥールなり。北方には有識者およ

び王国の大臣らの集りて座す謁見室あり。東方にはシヴァ教および仏教の聖者たちの教義を論ずる場所あり。またそこには月蝕のとき、国の幸福を祈らんため供儀に必要な多くのもの存す。

東方には三つづつ三列に並べる供火場あり。その中央に一つの高きシヴァの寺立つ。南方には階ミナタ高きブラーマの建物あり。南西には供儀のための小高き場所をもつ前庭あり。北方は仏教の聖者の建物にして三階の家そびゆ。その頂きは多くの彫刻に飾られて美し。これらすべては王が来給いて供儀、儀式の行わるるとき花を以て被わる。

マングントゥールより南方、内都へ向い少しの距離をへだてて常の謁見所あり。西へめぐる道の両側には一列にならべる美しき建物あり。それに沿い至るところミムソプスの花咲く。……そこに無数の鳥のかまびすしくさえづる前庭あり。……王に仕うる人々は群をなして謁を乞い、つねに交互に待ち合えり。

かくして彼らは敬意を表す。無数のパンガラサン来りてジャンガラおよびケデイリの比類なき象牙椰子を奉り、王妃のみの私用し給うシリを奉る。またかつて忠実に仕えしがため今なお愛寵を蒙るパネウラ、戦いにおける勝利者、大なる英雄、船人らはその手に青き藻をしぼりつつ来り、交尾期にある象を奉れり。

(第十二歌) ここでは町の周辺にある高位高官の邸宅の記述であり、宰相ガジャ・マダのそれも記されている。

われは都の周囲の有様を記すべし、東にはシヴァ教の僧侶住み、その中にてはブラーマラジャ僧正最もすぐれたり。南には仏僧住む。サンガ(仏僧)のうち最もすぐれたるはスタウイラ・レンカナディなり。西方にはクシャト

リヤ、マントリ、ブンガワおよび王族ら住めり。

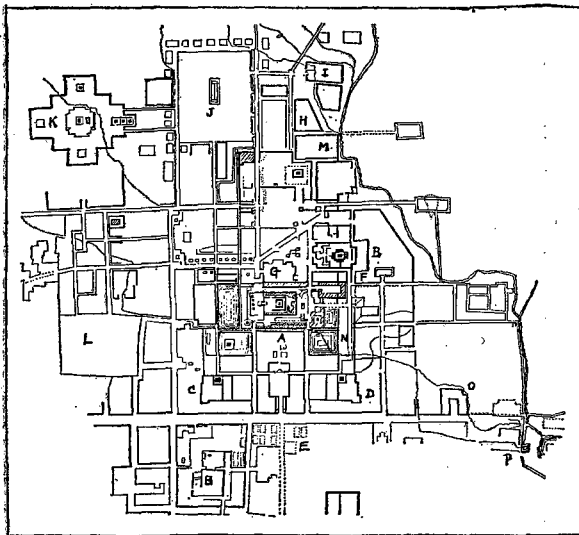
北方の大なる市場のかなたには最も美しき邸あり。ウェンケル公の実弟がその持主なり。君は王に忠実に従い、勇敢にして国政に賢く、ダハの大^{バタイ}臣として、バータラナラパティの地方にて人びとの幸福を増進させ給ひき。

北東はモジョパイットの大^{バタイ}臣ガジャ・マダの邸なり。マントリにして勇氣あり、賢く、正直に、真に大王に服従し、弁舌また巧みなり。沈着にして人に動かされず、国の財政官、また世界の支配者としての大王により与えらるる命令を維持する人なり。

大王の宮殿より南にはダルマディヤクサの美しき邸あり。それより東はすぐれたるシヴァ教の聖地にして西方にはまた壮麗なる仏教の寺あり。われはその他のマントリおよびクシャトリヤの邸宅は記述せざるべし。多くの邸宅にみる大なる変化こそ都の宝石ともいうべけれ。

日月にも似たるはこのたぐいなきチクタスリパハラ（モジョパイットの別名）の都なり。日月の光をとり入れて美しく輝く。多くの家々はみなそれぞれの美しさをもてり。これをめぐりてダハをかしらとする星辰のごとき多くの町あり。また他の島々は群りてジャワの支持を求め、属国としてここに伺候し来りぬ。

この記述にはモジョパイットが世界の中心であり、またジャワが東インド群島の中心であるとの觀念が明らかに認め



凡例

- A 王城
- B シヴァ教寺院
- C 仏教寺院
- D シヴァ教聖地
- E 仏僧居住地
- F シヴァ僧居住地
- G マングントゥール
- H 市場
- I ガジャ・マダ邸
- J 高塔
- K プバット寺院
- L プバット広場
- M ウエンケル公邸
- N 水浴場
- O パジャン・ラトゥー
- P ティクス寺院

第1図 モジョバイト復原図

られる。

さて第一図は以上のようなモジョバイト市についてのナガラクルタガマの記述と、現地の遺跡調査にもとづいてオランダの歴史家ストウツテルハイムの復原した見取図である(5)。市域は東西、南北それぞれ一・五軒にわたり、区劃もかなり整然としたものがあり、フロイン・メースの推定することく当時二十万—三十万の人口を包含したとするのは過大であろうが、中世ジャワの都市としては稀にみる繁栄を示したただけはたしかである。

(二)

第十三、第十四歌は当時のモジョバイト王国の版図を述べた有名な部分であり、多数の地名があげられているが東はニユーギニアから西はスマトラ、北はボルネオを始め、フィリピンのスルー群島やマライ半島方面までも含んでいる。遠い海のかなたまでジャワの力になびいている事実は当時のジャワ人に強い自信をもたせたことであろう。なおこれに引続く第十五歌、第十六歌はこれら広大な海外領土をもつモジョ

パイト王国が特有の宗教宣撫工作や海軍力の保持によっていかに巧妙な統治を行ったかが記述されている部分である。しかしこれについてはすでに筆者が別の機会で論じたことであるから、ここでは省略することとする。

(第十七歌)

他の土地を征服せしジャワの国における王の統治は今や確立せられたり。君はスリパラチクタの都にて王位にあり、つねに世界の幸福を進めんと力め給えり。拡大されしは君の高名と名誉となり。また君の官吏、僧侶らはすべて富を与えられて世に有名となりぬ。

壮大なるは高き支配者たる王の所有する権力と華麗さなり。憂いなく君はみづから楽しみ給ひぬ。ジャンガラとケデイリの美しき娘たちは能う限り選ばれぬ。また異国のをみなと雖も、もし美しければ後宮につれ来られぬ。

ジャワはその全土が大王の治下にある一つの都に似たり。無数の住民はその首都の廻りを動く軍隊にも似たり。凡ての他の島々は楽しみと安息の保証されたる田舎の地方のごとし。人びとは森も山も何らの危険なくして横断し得たり。

プラパンチャはここでも全東インド諸島におけるジャワと他の島々との関係を都市と農村の比較においてとらえているのである。

ハヤム・ウルク王は民情視察のために屢々国内の巡幸を行ったが、第十七歌から三十七歌に亘る長い部分はすべて

この巡幸の記録である。地域的にはモジョパイトの都からジャワ南海岸沿いに大体現在の東部ジャワブスキ州を含むところであり、当時の国土や住民の状態を知る資料として価値が高い。

(第十八歌) ハヤム・ウルク王の壮麗な巡幸の行列の記述から始まっている(?)。

大王がカプルンガンを出発し給うに当りては多数の人々従えり。大なる道はみる限り無数の荷を積める車にて進み難きほどなりき。前後には歩卒を伴う多くの人々従えり。多数の象と馬を伴いて進む部隊もあり。

車の数は数え難し。しかれども種々ことなる印しにて識別し得らる。またいかに大群をなして進むといえどもマントリ(官職)の種類により印しも異れり。マントリの中に最も著名なるはモジョパイトの宰相ガジャ・マダ閣下のそれなり。官廷の連絡者なり。

パジャン公の多くの車は太陽のしるし、ラセム公の多くの車は美しき白き牡牛を描きたり。ダハの公はダハの花を描ける金色の美しき車をもてり。

チクタウィルワの大王陛下はウィルワ(まるめろ)の実のしるしある無数の車をもち給えり。すべて赤色に塗られ、黄金にて飾られ、幕をそなえたり。王妃はじめステウイの女公、その他すべての婦人たちは赤色の車に乗りて先行す。

そのうしろに黄金と宝にて飾られし大王の車が続く。その光りははるか遠方にまできらめきぬ。ジャンガラ、ケ
ディリ、パスルアン、パングラランよりの多数の軍隊は密集隊形をなして大王を守る。

旅を続けて大王がクルル、バタン、カンガン、アセムに至りしとき太陽は涼しくなり、やがて陽は没し、暗黒が
広がりぬ。広き野の中にて王は幕舎の中に入りぬ。人々も仕事を終えてのち飲食し、そのおのの場所の中に入
りぬ。

(第二十二歌)

タンパルとパチュジュンガンにて大王は海岸にゆくことを楽しみ、砂浜に沿いて道を東にとる。君はすべて花咲
ける青き蓮と水薔薇にみてる湖水のほとりにて憩い給ひぬ。楽しみて君は底まで見ゆる透明なる水中に海豚の動く
を眺め給ひぬ。

われは湖と海との広がる美しさについては云わざるべし。ここを出でて君はウェデとグントゥールに至る。そ
の村は道に近くかくれてあり。昔開かれてタドラワジャの属領となれるバジラカの仏僧院はパチュジュンガンのそ
れとともに特権をもちたり。

これらの土地をゆきすぎて君は再び東方に海岸に沿いて森を通り給う。君はパルンブアンにて憩い、しばし狩り
してのち日の暮るるまで旅を続けぬ。君はまさしく潮のざわめきの静まりたる時をえらびてラブトラワンの水を渡

りぬ。バラタルのはざまを横切りて君は海べに夜の宿をとり給う。

次の日の早朝、君はクニルバシニに向い、間もなくサデンに來給いて宿泊せり。数多の夜を君は楽しみて過し給う。ここより大王はさらにクタバコクに赴き海岸にて興じ給う。心ゆくまで君は海を眺め給ひしが雨のごとく碎け散る波のしぶきにぬれ給いぬ。

当時の東部ジャワはジャワ史上第二の地域として開けつつあったところである。この記述にある地名は今日そのすべてを考証しえないけれども、ハヤム・ウルク王の巡幸はまずモジョパイトの都を出て東へアルジュナおよびテンゲル火山の北麓を過ぎ、それから今日のプロボリングとルマジャンとを結ぶ道を南下したものである。そうするとヌサ・バルンを南にのぞむジャワ南海岸の平野に出ることになる。モジョパイトの都から直ちに南へシンゴサリ、マランからスメル火山南麓を経るコースは歴史的には重要な地域ではあるが、ここから南海岸へ出る道は地形が峻嶒なため利用することは困難である。この南海岸平野には多くの河川が流れて今日も海岸近くはクラサク、タングルなどの広漠とした湿地帯を形成し人口稀薄な部分である。恐らく当時の海岸線はイヤン山塊の南麓沿いにルマジャンとジェンベルとをゆるやかに結ぶ線に沿ったものと考えられる。このあたりの地形変遷史、開拓史はジャワの歴史地理研究における一つの興味あるテーマをなすものであるが、ナガラクルタガマの記述は当時の居住地域の限界や開拓度をかなりよく示唆するものがあるといえよう。

(第二十三歌)

人々は再び遠くへ進みパカムバンガンに來ぬ。そこにて王は夜の宿をとり給う。また旅立ちて直ちにダヤの山谷

の入口に来れり。人々は深き谷の中に入りぬ。

道は海をはなれて北方に入り、すべての行程は困難なる狭き地域なり。雨ふりしたため山坂はすべりやすく、衝突して破壊されし車あまたあり。

これはジェンベルからジャワ北岸ボンドウオソの方へぬけようとしてイヤン、イジェン両山塊の裾合谷を通過したときの記事である。ここは今も東ジャワを南北に連ねる重要な交通路である。

(三)

ハヤム・ウルク王が宿营地に着くと人々はこぞって出迎え、趣向をこらした装飾物を展示する。これに對して王は仮面劇その他人々の喜ぶことを行なった。また人々が食物を献上するのに對し、王は衣料を分ち与えた。こうした記述がナガラクルタガマの至るところに出てくるのは興味深い。けだし民心把握の一手段としてであった。

(第二十六歌)

そこには海のなかに延びたる岬より内陸の方に向いて美しく作られし堀割あり。海岸との境にはさまざまの家ありてその広き前庭は一行に並びて位置し、遠くよりは島のごとく見えたり。またその入口は霞みてゆらぐ波のごとし。そはアリア・スラディカラ(地方長官)のすぐれたる仕事にして大王の来着を迎えんがための装飾なりき。

(第二十七歌)

屢々なるは大王がなさしめ給いし遊戲にしてその地方の人々の心を満足さすべきすべてのことは行なわれぬ。仮面劇、模擬戦は人々を驚ろかしたり。全く大王は地上に下り、また世界を巡幸せる一人の神なりき。

(第二十八歌)

大王が一時パトゥカンガンにとどまりしのち、バリおよびマドラの最も著名なるマントリら来れり。かれらはあらかじめバラムバンガンにて休みぬ。全東ジャワはこぞりて伺候せり。

人びとはすべて豚、羊、水牛、牛、鶏、犬などをあふるるほど夥しく献上せり。衣料はそこにてうす高く受け取られぬ。観るものは恰も地上よりつれ去られしごとくに心に驚ろきぬ。

(第三十一歌)

大王がそのつとめを果し給いてのち、君の心を望みたるすべてのものに与え給いぬ。すべて君の訪れし地方の人々は来れり。君はそこにて数夜を最も高き心にて満足し給いぬ。後宮のための美しき女性を君は得たり。未だ人の手のふれざるすぐれたる処女なり。

当時ジャワの国内各地にはシヴァ教、仏教の僧院があつたが、ハヤム・ウルクはこうした聖地をたえず訪れ、人々を喜ばせた。従つてそこを立ち去つたときはみな名残を惜んだものである。

(第三十三歌)

王は隠所(僧院)をめぐり給い、そののち著名なるマハルシがあらゆる方法にて隠所のもつすべてを親しみある言葉にて捧ぐるを受け給いぬ。大王は金銭を与えて満足し給えり。

さまざまの会話において彼らは隠所の意義をかくす処なく語れり。終りて君はあたりを逍遙し、訪ねたるすべて

の美しき場所に心を奪われたり。そは僧院の男女を喜ばし、みな感動して見やりぬ。

君は楽しみてのち僧院の人びとに帰途につくべき旨を述べ給う。君が再び旅を続けんために外に出でしとき、残りし人々は心たのしき思い出をもち、若き、美しき隠所の娘たちはなつかしみつつ見送れり。

(第三十四歌)

大王が帰り給いしのち、隠所はすべて悲しめり。竹は悲しみにふくれ、皮は落ちぬ。シリーは泣きやまず、森の鳥は叫びぬ。その涙は椰子の汁にも似、野にいるベオの叫び声も悲し。

(第三十七歌)

悲しめるはまた少しの穀物も集められざりし地方の人々なりき。かれらは大王が助け給うことのみを待ちわび居たり。……人びとに対しては慈愛にみち、悲しめるものにはつねに同感し給う。君は全くうつし身の神なり。これによると王は凶作の地方の人々にも救いの手をのばしたことがわかるようである。

東ジャワ北岸に出たハヤム・ウルクはブレレンに滞在してその風光を賞でたのちシンゴサリに向って帰路につく。

(第三十八歌)

ブレレンの愛らしきものは大地よりわき出づる澄める青き池なり。自然石をもて作られしチャンデイ(小祠)の一つがその中央に建てられてあり。あたりは花の香にみてり。この地はつねに人びとのたのしむところなりき。

われはその美しさについて語るをやめん。陽の暑さの衰えしころ、君は出で立ち、高きテガルの野をこえて道をとりぬ。そこは厚き、美しき、平たき緑の草が秀で、その広がりには小さき海を思わすごとく波うてり。

このあたりは乾季の東ジャワの自然景観をよく表現している。テガルというのはジャワに多くみられる原野地域に普通の名称ではあるが、この場合は地理的位置からみてテンゲル山塊の東部、ブンダクレンブー山の北麓あたりをさしたのではあるまいか。今日もそこにテガルの地名が残っているのである。

この巡幸の帰途作者プラパンチャとはある僧院に白髪の老人アサリヤ・ラトナムサというものをたづね、その口からシンゴサリ王国、さらにモジョバイト王国成立の歴史をきき出すのである。この歴史は第三十八歌から第四十九歌まで長く述べられている。歴代の王の行為、王位継承、各王の墓所、ことに当時は墓石の代りにヴィスヌやシヴァの像を建てる習慣であつたがどの王にどの神像が選ばれたかなどがよく判る。また社会的に注目すべきものは第四十歌にシンゴサリ王国時代に始めてダブル（炊事場―台所）とクウジュル（分娩の際の一時的な産室）がジャワの民家に一般に用いられるに至つたと記されていることである。

ハヤム・ウルク王は都への帰途ナンダワナの野で勇壮な狩猟をおこなつた。これは第五十歌から五十四歌まで極めてヴィヴィッドな描写のなされている部分である。

（第五十歌）

われは大王がいかに狩猟地に出で給いしかを記すべし。君は従者、武器、車および馬をつらねてナンダワナへと向い給う。そはゆくこと難き森にしてめづらしき木多く茂り、また至るところカサとムニアの草生いしげれり。

軍隊は包圍運動をなせり。あらゆる側よりかれらは野を囲みぬ。車は準備成りて密に並び立てり。森は囲まれぬ。猿は恐れおののきぬ。鳥も動揺して飛び去らんとす。

従者らの叫びは森にこだます。かれらは草に火をつけ始めぬ。恰も潮鳴りのごとく野は燃え始めたり。燃え上る火は中空に達し、むかしカンダワの森がアグニの神により焼かれしもかくやと思わる。

人びとはいづくに逃るべきかを知らざる鹿の群をみたり……多数なるはゴウラジャ（厩舎）におけるガワヤのごときなり、ウルサバブラの野牛にてみちたり。その他猪、牡鹿、水牛、ヤマアラシ、兎、大トカゲ、猿、犀などあまたあり。……かれら（動物たち）は森の王シンガ（ここではジャワ虎をさす）を囲みていかにすべきかを語れり。ナンダワナの野は都に近い土地とあるが、地理的条件から考えて恐らく今日のペナンガンガン火山の西北山麓モジョサリ町あたりを中心としてひろがる原野だったのであらう。記述によれば森と草原の混交する土地のごとくであるが、これは雨量が多く全体が密林で被われる西ジャワの景観とは異なり、雨の少ない東ジャワ特有のサバンナ景観に外ならぬ。樹木はほとんどチークである。ジャワは動物の天国ともいわれるが開拓の進まなかつた古代にはここに記されたような各種の動物が豊富に野生していたのであらう。たとえば「鹿」は特有の小鹿（*Tragulus der Herk. auvers*）でジャワの丘陵地帯に多く棲み、古くからジャワの伝説などと結びついてきた。「ウルサバブラの野牛」はジャワ特有のバンテン牛（*Bos Sondaicus*）にちがいない。これは今日は西ジャワのバンテン州の一隅にだけみられるにすぎなくなつたが当時は東ジャワ方面にまで分布していたものと思われる。「犀」もここに記されているが今で

はやはり西ジャワの奥地だけにしか見出されない。このようにしてジャワの動物分布も当時は現在とはかなり異った様相を示していたことが理解されるのである。

ナンダワナにおける狩猟のあと、王はいよいよ人々の歡呼して待つモジョパイトに戻ってきた。次はその描写である。

(第五十九歌)

われらをして大道に待つ人々につき語らしめよ。恰も閉ぢられし貯水池のごとくかれらは路傍に密集せり。互によりそいて王が過ぎ給うまで忍耐強く待ちぬ。女どもは急ぎ騒ぎて場所を争えり。急ぎたるあまり着衣を失うものすらありき。

家の遠きものは高き木の中に席を見出さんとして忙し。その枝には娘、老人、若者らが花のごとくにつかまれり。勇敢に椰子の木、またバナナの幹にのぼるものもあり。かれらの心はただ大王を見ることのみにより占めらる。

大王の来給うや、盤と笛とが鳴りひびく。大道の人々はすべて静かなる畏敬の中に身をかがめぬ。……象、馬、驢馬の列が続き、歩兵は密集して行進せり。そのうしろには駄夫続く。かれらはいずれも胡椒、サフロル、棉、椰子の実、シリーの実、アッサムの実などの荷を運び来れり。

ハヤム・ウルク王はジャワ曆一二八四年（一三六二年）王城内で祖母のための大追悼会をおこなった。この記述は第六十三歌から第六十七歌にわたってみられる。そのための準備も大規模なものであった。

（第六十三歌）

スラワナの暗き月の最後の日、バドラパタの直前に都のあらゆる絵師はムングントゥールにおける「獅子の場所」を作るため二倍の働らきを命ぜられぬ。各種の食器、徽章、神像を作る工夫も多忙なり。ダダップ（ワヤンの人形）の製作者、金銀細工の職人らも日に夜をついで働らきぬ。

当時のモジョパイットにおける特殊手工業者の存在がこの記述によってうかがい知られる。そしてこの祭式には王をはじめ高位高官のものがそれぞれに趣向をこらした記念の捧げものをした。

（第六十五歌）

大王は他と比較しえざる驚くべき捧げものを為し給う。そは神と悪魔の廻転せしめ得る像にてめぐらされしマンガラの山なり。見るものはみな心に恐れを抱けり。常ならず大きく恐ろしきはうねり泳ぐレムボラの魚なり。

このマンガラとはヒンズー神話に現れる神聖な山で神と悪魔が大洋をかきまわす時の道具として使われるという伝説をもつものである。

マタフン公の捧げものは白き牡牛の像なりき。特に牛の口より絶えず食物を生み出すしかけは見る人々を驚かせぬ。

六日の夕暮、大臣ガジャ・マダは伺候し、祭典の捧げものを為せり。そは密に編まれしナガプスパとラジャサの

花に被われし喪に服しつつある美しき女の像なりき。

こうした記述はわれわれに当時のジャワ工業の水準の高さを推察させるものがある。

ハヤム・ウルクはシンピンの聖地を訪れているとき宰相ガジャ・マダの病篤きを聞き急いで都に帰った。ガジャ・マダの死と協力者を失った王の悲しみ、またそれに伴う政治体制の変革などは第七十歌から第七十二歌に亘つてのべられている。

(第七十歌)

大王はシンピンより直ちに都に向い給う。ジャワ国を偉大ならしむるため尽せし最高の官吏ガジャ・マダの病氣を悲しめてなり。バリおよびサデンにて彼（ガジャ・マダ）は強敵を打ち破りし人なり。

(第七十一歌)

サカ年一二五三はガジャ・マダが始めて全国の権力を身に負いし年なりき。サカ年一二八六に彼は死せり。大王は落胆し失望せり。全く彼（ガジャ・マダ）はすぐれたる人にして享樂を求めず、全世界に対して情深く、すべて世の事は不定なる本質を考え、殆んど毎日善事を実行せし人なりき。

モジョバイト王国の政策は三十余年に亘ってガジャ・マダの独裁下にあつたが、その死に伴い王は會議を召集し、ガジャ・マダが一身に握っていた権力は数名の大臣により分担されることになった。これについても既に筆者が記したことがあるのでここでは省略する。

第七十三歌から第七十八歌までは国内のいろいろな聖地が列挙されているが、第七十九歌以後再び当時のジャワ国内の事情をうかがい得る資料があらわれてくる。その第一はジャワで村落調査が実施されたことである。その範囲はバリ島にまで及んだ。

(第七十九歌)

すでにジャワのすべてのデサの状態は調査せられたり。それは為されし第一のことなりき。聖地、自由なる土地、家族の土地、カランギャンとよばれる居所、財産の権利の証拠をもてるすべてのものは確かめられぬ。

ウエンケル公がデサを調べかつ記述すべき命令を出せり。シンゴサリ公はあらゆる種類のカマドを調査する命令を出せり。命を受けし官吏らは忠実にその仕事をみだし、その結果ジャワ国民は大王の命に従いて行動することゝを学びぬ。

カマドを調べることは戸数を、同時に人口を調べることで日本、中国その他でも古く行なわれた国勢調査の方法であつた。

バリ島はあらゆる慣習においてジャワと同一なり。従つてそこにおいても聖地、一時的の居所(クウ)が調べられぬ。僧院はそを保護する目的のためことによく調べらる。

(第八十歌)

ジャワ国は国を横切り海によつて止めらるるまでくまなく調査せられたり。いかなる行者も海岸、山、森、遠き地方にても心安く過し得らる。かれらは満足して信仰にふけり、それは同時に世の幸福を増すこととなれり。

第八十一歌には国内の諸階層についての記述がみられる。

今や国民のすべての階級は大王の命に忠実なり。最も著名なるマントリ、アリア（いづれも大臣）は国の統治に十分なる経験あり。クシャトリア（戦士）はその態度貞節に慎重なり。全国のヴァイシヤ（農民）もスードラ（奴隸）もその定まれる職業をたのしむ。……三つの低き民族階級すなわちカンダラ、ムレツカ、トゥツカすら慎重にその礼儀を致せり。

ヒンズー教国たるモジョパイトではインドのカースト制度がそのままに施行されていたことがわかる。「三つの低い民族階級」とはジャワ人以外の被征服民族の集団をさしたものである。

モジョパイト王国の隆盛に伴い、海外との交通もさかとなり、また人々はハヤム・ウルクの政治を祝福するため毎年フアルグナ月に祭典を催した。

（第八十三歌）

かくの如きがモジョパイトにて唯一の支配者として治め給う大王のすぐれさせ給えるところなり。秋の月のごとく君は高く評価せらる。そは世界を喜びにてみたすためなり。君の官吏、貨幣、車、象、馬は海のごとく計り難し。

時の長きほどジャワのめぐまれし状態が続くことは今や全世界に知られたり。人はいう、ジャンブドウィパ（インドのこと）とジャワのみが世に最もよき国なりと。……その結果として他の土地より多くの人々がたえずジャワを訪れたり。ジャンブドウィパ、カンボジャ、支那、ヤワナ、チャンパ、カルナタカ、ガウダおよびシヤム、これらの人びとは船にて多くの商人とともに来れり。仏僧および名高きブラーマンも来りて饗応を受け、喜びて滞在せ

り。

毎フアルグナ月には大王は崇められ、その統治を祝福されぬ。ジャワのすべての高官は地方の長、村長、判官、ウパバティらとともに都に集まる。バリをはじめ他の島々の人々も来りて常に大王に無数の捧げものを致せり。市場はあらゆる商人のもたらず品物にてみちあふれぬ。

この祭典には王もみずから出席した。また毎年サイトラの新月の日にはハヤム・ウルクは軍隊を召集して訓示を与え、その後都の北郊ブバットの広場で武道の訓練をおこなった。これは第八十五歌から第八十七歌に亘って詳しく記されているところである。

第八十八歌ではモジョパイト副王が地方官を集めて地方行政についての訓示を与える記述があり、その中で当時の農業事情などを窺いうる資料がみられる。

(第八十八歌)

ウエンケル公(モジョパイト副王)はすべての村の長老たち、ウエダナ(代官)らに向いて云いぬ。//汝らは正直に、真実に、かつ忠実に愛を以て大王を君として仕うべく留意せよ。汝らの地方を固め、汝らみずから地方の安寧を増加するすべての仕事に従わしめよ。橋梁、道路、ワリンギン(ジャワの聖木)、家屋およびすべての聖なる記念物に注意せよ。//

凡てのものを植えられし著名なる畑(ガガ)と水田(サワー)は榮えよ。而して保護され、愛撫さるべし。堤防

を作るごとき土地は洪水が起らざるよう、また人々が他の土地に流亡せざるよう固めらるべし。もしかか場合には人々はプラティグンダラ（王国の訓令）に従うべし。そこには難を逃れんとする地方の大きさが書かれてあり。

クルタワルダナ公は耕作に用うべき村の大きさについて命ずるところあり。而して毎月の終りにカマドが数えられるべし。また人々は姦通に始まるすべての犯罪を見守るべし。而して国を保護し給う大臣の収入が増加することくつとむべし。

この副王の訓示が終るとさらにハヤム・ウルクはみずから集った地方代表に訓示するところがあった。その中には国防の重要性を説く次のような言葉がある。

（第八十九歌）

首都とそれに属する地方とは密林と獅子との関係に似たり。耕地が破壊さるれば首都もまた生活資料を失う。さらに国家と軍隊との関係もまたこれに同じ。軍隊なかりせば他の島々より侵略を受くること明らかなり。人は安全のために耕地と軍隊とを守らざるべからず。

そのあととは一同そろつての盛大な饗宴であつた。

（第八十九歌）

饗宴の幕舎（ウイタナ）は北東にあり、美しく飾られたり。三つの幕舎に人々みちあふれて座す。珍味は運ばれ来りぬ。容器はすべて黄金製なり。食物は昔よりの宗教の掟に従いて羊、水牛、鳥、鹿の肉、蜂蜜、魚、卵などより成る。また人々はおのおのその地方により嗜好を異にするために、その望む特別の料理も運ばれぬ。

美味なる酒もその種類多し。椰子酒、棕梠酒、アラク、アレン、キラン、ブレムおよびタペなどこれなり。容器はすべて黄金製なりき。

(第九十一歌)

大王は興に乗じて歌い給いぬ。そは愛らしきにおいて孔雀のさえづりに似、快ろよき甘さにおいて蜂蜜に似、またそよぐ葦のごとく魅力あり、聞くものを感動せしめぬ。

クルタワルダナ公もガメランを奏し始め給う。王妃は美しきトゥクス（かつら）をつけて歌い給う。喜びはすべての人々の心をみたしぬ。

第九十二歌は王への新たな頌詩である。

君は若けれども、また多くの快樂を求め給えどもなほ賢人としてうつし身の仏陀なり。その正しき高き知識により君は罪を浄めらるるなり。

終りなきは君の勇ましきにして遠く雲にまで至る。たしかにギリナータ（シヴァ）は君の体に顕現して世の幸を進めたるなり。君の命に反するもの、かれらの仕事にわき道をとるものはすべて災厄を受けん。

世の人々の望みはただ君のいのちが永く、山のごとく強固に、また世の避難所たらんことなり。君が時の長きにおいて太陽と月にも似て世を照らし給わんことを祈るのみ。

以上でナガラクルタガマの本文は終っており、あとはプラパンチャがこの詩を作った時期その他が六つの歌となつ

て書かれている。

結 び

歴史記述上からみたナガラクルタガマの価値についてはオランダ史学界においても最初の翻訳者ケルン、或はクロムと近年のベルフとは若干意見を異にし、これは最近のベルフの論文にも詳しいが(6)(7)ここではそれに触れない。ただ本稿では日本の多く東南アジア研究者にとって今まで殆んど親しまれていないこの史料の概要を紹介するとともに(10)ある時代のある地域の復原を目標とする歴史地理学にとってもこれが重要な文献であることを指摘し、これを中核として中世ジャワの歴史地理の本格的な研究が日本でも始められることを期待するものである。

註(1) Het Loifgedicht Nagarakrtagama. 1919. 本稿のテキストとして使用したのはこれである。

(2) C. C. Berg: *Historians of South East Asia*. 1961. p. 21 (D. E. G. Hall 編)

(3) Krom: *Hindoe-Javaansche Geschiedenis*. 1927. p. 423.

(4) 西歴七十八年を紀元元年とするジャワ暦の年をいう。

(5) W. F. Stutterheim: *Cultuurgeschiedenis van Java in Beeld*. 1926. p. 78. 彼はこの復原に當って現存するシヨクジャカルタ、スラカルタの王城のプランおよびバリ島のクルンクンの旧都の遺跡を詳細に調査して比較した。

(6) 拙著、東南アジア諸島の居住と開発史、昭和三十五年、二〇二頁。

(7) この巡幸はオランダ画家 Van ch. Sayers に於いて美しい絵に描かれている。Stapel: *Geschiedenis van Nederlandsch-Indie*. I. p. 274 参照。

(8) D. G. E. Hall 編: *Historians of South East Asia*. 1961. p. 165—166.

(9) C. C. Berg: *Javansche Geschiedschrijving: Literaire magie* の章 (*Geschiedenis van Nederlandsch-Indie*. II. p. 55—58) 参照。

(10) なおナガラクルタガマをデータとしてモジョバイトの政策を論じたものとして左記論文を参照されたい。拙稿・モジョバイト王国のジャワ統治政策——ハヤム・ウルク王を中心として。経済学雑誌、二十二卷三号。